

---

# 召喚魔法

月乃宮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

召喚魔法

### 【Nコード】

N9460S

### 【作者名】

月乃宮

### 【あらすじ】

召喚士リユシームの手によって、『間違い』で異世界へと呼び出されたイズミ。異世界トリップなんて嘘でしょ、しかも帰れないってどうということ!？ ほのぼの異世界トリップ・ファンタジーです。

## 1・ 召喚された

ありえないことだけど、異世界トリップってあるということだ。  
あたしはまさに、それを体験してるのだ。

「ああ、間違えた…… ホントごめん」

「ごめんですむなら、ケーサツいらんわ」

魔法使いのようなローブをはおった、グレーの瞳のお兄さん。西洋人のような東洋人のような、なんだか収まりの悪い、だけど端正な顔。蛾ものように白い肌。そして長い長い黒髪。どこかで見たことあると思ったら、ファンタジーの世界の人みたいなんだ…… もちろん漫画の中の話だけど。

「ここはどこ？ あたし、どうしてここにいるの？」

「ここは私の城で、君は私の召喚術によって呼び出されたのだ」

「ショーカン、ジュツ？ なにそれ」

「魔族を呼び出す魔法の一種だよ。私は召喚士であり、つまり魔法使いなんだ…… ああ、君は異世界から来たんだっけ。魔法使いつて意味、分かるかな。つまり」

「魔法を使う人でしょ。そんなの分かってるわ」

「そうか、それはよかった」

「よくないわ！ 魔法なんてフィクションの中だけよ、私の常識では。ここは一体どこなの？」

「だから私の城で……」

「それはもう説明してもらったってば」

会話が途切れ、あたしと目の前の魔法使いは困惑気味に向かい合った。こっちもうるたえているが、あっちもだいぶうるたえている

ようだ。なんとかこの場を仕切りなおさないと。

「……分かった、とにかくあたしを元の場所へ帰してちょうだい」  
「どうやって」

「どうやってって、こっちが聞きたいんだけど」

「君の世界の位置が分からない」

「はあ？」

ちよつと待つてよ。

「私は魔族を呼び出す予定だったんだ。君の世界からではなく、別の世界から」

「はあ……」

「それなのに、どこをどう間違えたのか、君を呼び出してしまった。君、本当に魔族じゃないの？」

「ちがいます」

「冗談じゃない。あたしは憤慨したように目の前の優男をにらみつけた……男は不思議なグレーの目を細めながら、何やら思いついたようにゆっくりと口を開いた。

「待てよ、君とは魔法を介して意思の疎通を図っているわけだけど……」

「魔法を介してって、どういうこと」

「私たちは使っている言葉が違うだろう」

「ああ、そういうこと」

「とにかく魔法を介して言葉を理解しているわけだけど、どうも『魔族』という言葉の定義が違うようだ。君の常識で言つといるの『魔族』って、どういう意味？」

どういう意味って……。十七年生きてきて、『魔族』の意味きかれたのなんて初めてだわ。どう説明しろっていうのよ。

「つまり『魔族』って悪魔ってことでしょ？ だから悪い人で、しかも悪い魔法使ったり、悪いことしたり……。まあそういうことよ」「つまり『魔族』じゃない君は悪い人でもないし、悪い魔法も使わないし、悪いこともしない、ということか」

「うん……。悪いことは程度にもよるけど。勉強さぼったり、弟とケンカして泣かせたりって意味での悪いことならしたことある」

「人を呪い殺したり、という意味ではないわけだな。なるほど、では私の『魔族』の定義の方だが……。残念ながら、君の常識と少々違うようだ。まず魔族は悪いことをしない。ああ、君が行う程度の悪いことはすると思うが。あと悪い魔法も使わないし、そもそも悪い人とは限らない」

人を呪い殺すって。ずいぶんサラリと物騒なことを……。

「じゃ、じゃあ、あなたの言うところの『魔族』って？」

「私の言う『魔族』とは、私の召喚術によって呼び出された者を指す。つまり君も立派な『魔族』というわけだ」

「ちよっ……。それってなんか、おかしくない？ 大ざっぱすぎるでしょ」

「私の召喚術に応じる者は、すべて『魔族』とみなす。普通の人間ではない」

「普通の人間ですが！」

「それは君のいた世界では、という意味だろう。ここでの君は、立派に『魔族』とみなされる」

「そ、そんな……」

召喚一日目にして、すでに『魔族』決定。

11のファンタジー・ストーリー、夢がなぞすける……！

( へん )

## 2・弟子になった

夜になったらさっそくホームシックになった。

案内された客室はまるで西洋のお城のお部屋みたいで、フツーに旅行先ならお姫様気分を味わえたかもしれない。

でも異世界にいるあたしにとって、こんな非現実的な部屋なんのなくさめにもならない。いくら能天気なあたしでも、この状況で「わゝ、素敵なお部屋」なんて浮かれちゃえるほど適応力ないもの。

「だって異世界だよ？ 自力で帰るなんて絶望的じゃん……」

悩みの種が受験だった昨日がなつかしい……高校二年になっても志望校が決まらず、親と学校の先生をやきもきさせた。予備校の先生は親身になって相談に乗ってくれるけど、当の本人であるあたしにやる気がなかった。

勉強なんて大嫌い、受験なんてこの世から消えちゃえ、って思ってた。

でも受験が消える代わりに、あたしが消えちゃったわけだ……そんなこと考えてたからバチが当たったのかな。あたしがいなくなっちゃって、向こうの世界じゃ皆心配してるかな。

「ああ、まだ実感がわかない……ここホントに異世界だね？ あたし夢みてるんじゃないの」

例えば受験を苦に頭がおかしくなっちゃったとか。それともぼんやりしてて、いつの間にか事故にあって、今病院で昏睡状態だとか。目が覚めたら病院でした、あたしってば変な夢みてた……ってオチ

だったりして。

そんな風に考えながらいつの間にか眠ってしまったあたしは、翌朝目覚めた時あいかわらず同じ客室のベッドにいる自分に気づいてガツカリしてしまった。

やっぱり現実だったんだ、とさらに落ち込んだ。憂鬱な気分は時間を経つにつれ、どんどん増していく。

……そんなこんなで気がついたら、ひと月ほど経っていた(！)

最初の頃は客室にいたけど、後日『君の部屋だ』とあてがわれた部屋へ移動した。今はそこで寝起きしている。

そんなに豪華ではないけど(そこはむしろうれしい)それでも日本いた頃の感覚からすればかなり立派な部屋。テレビやPCは無い。この世界にそんなもの存在しない。

ただし、魔法はある。

ホントなんで魔法なんかあるんだか……ファンタジーの世界がリアルになるとやっかいだ。なんせこのファンタジーな力のせいで、あたしはこの世界に連れてこられちゃったんだもの。

あたしは盛大なため息をつきながらも、朝食を食べにダイニングルームへと向かった。いつもはひとりで食べるのだが、この日はめずらしく先客がいた。

「おはよう、イズミ」

「……おはようございます、リュシームさん」

あたしをこの世界に引き込んだ張本人リュシームさんは、この世

界では高名な召喚士らしい。あたしを呼び出すなんてヘマとして高名なんてウソなんじゃ、と最初のころは疑ったもんだけど、何千回？も召喚術を行なってきたリユシームさんの失敗例はたった一度だけ、あたしを巻き込んでしまった今回の件のみだそうだ。つまり宝くじ当てるぐらい滅多にない、稀まれなことらしい。

宝くじなら当たって嬉しいけど、こんな異世界トリップ全然嬉しくない。

通常の異世界トリップだったら『あなたをお待ちしております』とかいって神子だかなんだかにまつり上げられた拳句、りりしくも若い国王様と結ばれたりするもんじゃないの？

まあちよつと妄想入ってるかもしれないけど、間違っても『間違っ  
って呼び出した』なんて言われたりしないし、しかも『君は魔族だ』  
なんて言われたりしないでしょ。おかしいでしょ、こんなの？ う  
ん、絶対おかしい。

「イズミ、難しい顔してるね。悩みごと？」

「はあ」

不毛にも、毎朝あたしは『おかしいでしょ、こんなの？』『うん、  
絶対おかしい』と同じことを自問自答してる。もはや習慣化してて、  
どうやらこれをするので、あたしは自分が異世界にいることを実  
感するみたい。じゃなきゃ現実逃避しちやいそう。

「ライラから聞いた。さいきん食欲が落ちてるみたいだって」

「はあ……」

ライラさんはこのお城で働いている数少ない女中さんのひとりだ。  
お城は広いせいか、色んな人が住み込みで働いている。そして会っ

たことないけど、リュシームさんのお弟子さんも何人かいるらしい。いったい何人くらいこの城に住んでいるんだろ……そんなこと考えながら目の前の料理をつつく。

「まあ、食欲ないのも無理がないと思う。君がここに来てから、もう一ヶ月か……」

リュシームさんはカチャリとフォークを置くと、ふうっ、と大きなため息をついた。気まずい空気が流れる。あたしもつられてフォークを置いてしまった。そもそも本当に食欲ないし。

「あとう、あたしの帰る方法って」

「ごめん、まだ見つかってないんだ」

「そうですか……」

もしかしてあたし、あきらめた方がいいのかな。あきらめて、この世界で生きていくための将来設計でも立て始めた方がいいんじゃないだろうか。

「あとう、リュシームさん」

「なに」

「あたし、なにかやった方がいいでしょうか」

「なにかって、なんのこと？」

「その、この世界に長居することになったらと思うと……勉強とか、仕事とか？ 仕事って、やったことないけど」

するとリュシームさんはふむ、と考え込むように目を伏せた。

「どうせなら勉強もかねて、仕事をしたほうがいいな。僕の助手は  
べっ……」

「助手って、召喚術の、ですか？」

「召喚術だけじゃなく、魔法の勉強もできる」

魔法の勉強！？ それって、あたしみたいなフツーの人にできるわけ？

「やってみる？」

「はい、ぜひ！」

「じゃあさっそく今日から始めよう。朝食終わったら一緒についてきて」

少しだけ気持ちが上がった。どうせファンタジーの世界にいるなら、記念に魔法のひとつぐらい覚えて帰りたいじゃない？

(つづく)

### 3・エルナンさんとラッセさん

リュシームさんの助手になってから、あたしの日常は一変した。

まず朝食から始まって昼・夜と、必ずリュシームさんと一緒に食事をするようになった。お茶の時間も夜食も一緒だ。この世界にきて早一ヶ月……助手になるまで一緒に食事どころか、ほとんど顔も合わせなかったのに、今じゃ常に行動を共にしている。

なにしろリュシームさんは忙しい。

朝食済んだら、すぐに召喚士のお仕事に取りかかる。お仕事の合間をぬって食事したりお茶を飲んだりするので、つまり起きてる時はほとんど働きっぱなしということになる。

だから助手のあたしも必然的に、リュシームさんと一緒に過ごす時間が長くなる。長くなるというか、寝てる以外はほとんど一緒だ。考えてみると、家族と違ってこんなに長く一緒にいたためしがない。だからかな、こっぴど一緒だと自然と情もわいてくる。あんなに働いてるのみると、さすがにちよつと心配。

「過労でたおれたりしないかな」

資料室の本を整理しながらばやいたあたしの言葉に、リュシームのお弟子さんの一人エルナンさんが顔をあげた。

「師匠に限ってそれはありえませんか。もっとお若い頃は、連日徹夜なんてざらだったそうですから」

「ひえ〜、今はそこまで無茶してませんか？」

「体調を崩さないよう、十分気をつけておられるはずですよ。なにし

る魔法を使うには、身体のコンドイションを整えておくことが大事  
ですからね」

「へー、そうなんですか」

こんな風にエルナンさんと難なくしゃべっているが、それもひと  
えに魔法のおかげなのだ。リュシームさん同様、お弟子さん二人と  
もあたしには魔法を介して話しかけてくれる。

「魔法って便利なんですねえ」

今さらながらしみじみつぶやくと、エルナンさんはおかしそうに  
「あなたも習ってみては？」と提案した。軽く言ってくれるなあ。

「無理ムリ、これでもトライしてみたんです。でもちつともうまく  
いきませんでした」

「まだ助手始めて一週間そこそこでしょう？ しかもあなたには師  
匠がついているではありませんか」

「いえ、そーゆー問題ではないんです。なんとというか、そういった  
特殊能力がないんですあたし。感覚がつかめないっていうか……ほ  
ら、あたしこの世界の人間じゃありませんからね」

「そうか、あなたは異世界から来たのでしたね……と、師匠」

ふりかえると、そこには羽ペンと紙を手にしたリュシームさんが  
立っていた。

「ふたりとも、こっちへ来て手伝ってくれ。新しい召喚術を試す」

「はい」

「かしこまりました、師匠」

資料室の隣の部屋『召喚術実験室』へやってくると、そこにはす

でももう一人のお弟子さん、ラッセさんが待ちかまえていた。ラッセさんはあたしたちに気づいて顔をあげたけど、無言のまま再び視線を手にした本に戻す。あいかわらず寡黙かもくな人だなあ。

「ラッセはその配置のまま、エルナンは窓のそばに……そう、そこに立つ。それからイズミ」

「はい？」

「君は私のそばを離れないように。いいね？」

「はい……」

いつもながら役に立ってるんだか、立ってないんだか分からない状態のあたし。でも召喚術の実験のときは、リシュームさんはよくこうしてあたしを立ち合わせる。

一度理由をきいてみたら『勉強になるかもしれないから』だって。何をやってんだか、さっぱり分からないんだけど勉強になってるのコレ？

フワリ、と額にふれた温かさに意識が覚醒した。

「イズミ」

「ん……まぶし……」

「イズミ、起きなさい」

「……リユシー……？」

「寝ぼけてるね、ほら起きなさい」

目をこすって頭をあげると、部屋は薄暗くてよく見えない……視

界の端にわずかな光も残ってなかった。さっきまで異様にまぶしい  
と思ったのは、夢の中の出来事だったのかー、そっか。

ん。待てよ。

「うわあっ、今なん時ですかっ!？」

「もう夜の九時過ぎている。待たせて悪かったね、今日の仕事は終  
わったからもう部屋へ戻りなさい」

そっか、あたし召喚術の実験を続けてたリュシームさんたちを待  
つてて、いつの間にか寝ちゃったんだ。ちよつとよだれとか垂らし  
ちゃったよ……あわてて机の濡れた部分をごしごし拭くと、隣で笑  
いをこらえてるリュシームさんを感じて恥ずかしかった。

「え、えーっと、そっだ、今変な夢見たんですよ」

気まずさをごまかすように、あたしは急ぎよ思いついた話題を口  
にした。

「なんか目の前がやたらまぶしくって、何だろっ何だろっって思っ  
てるうちに目が覚めただけなんですけど、目が覚めたら逆に真っ暗  
でびっくりしちゃいました。あはは」

「……」

「さ、さーとと、もう部屋に戻るっかな」

「うん」

「じゃあ、あたしはこれで」

それなのに、あたしの顔をじっと見つめたまま動こうとしないリ  
ュシームさん。あたしは首をかしげた。

「あー、リュシームさん？　どうかしました？」

「うん……いや、何でもない」

「？　そうですか、じゃあお先に失礼しまーす」

「イズミ」

扉に行きかけたあたしは、振りかえってリュシームさんの言葉を待つ。リュシームさんは何度か口を開きかけて、それから視線を机に落とすと、フツと小さく笑った。

「リュシー、ってさつき呼んでたね」

は？　なんのことだろう。

「さつき寝ぼけてたとき」

「そうでした？　えっと、気に触ったのならすいません」

「いや、そういう意味ではなくて……ただ君がリュシーの方が呼びやすいって言うのなら、それでも構わないが……」

「え？　いえ別に……」

『リュシームさん』も『リュシーさん』もたいして差がないよ。

「そうか、なら別にいいんだ」

「はあ」

「じゃあお休み、また明日」

なんだっただろう、今のやりとりは……あたしは腑に落ちないまま部屋を出ると、そこにはラッセさんがいた。

「あ、お疲れ様でーす」

「……お疲れ様」

うわっ、めずらしくラッセさんがしゃべった。しかもちょっと笑  
ってた気がする……貴重なものを見た感じ。

(くっく)

#### 4・町見学とその後

「町、ですか？」

「そう。今日の午後連れてくからそのつもりで」

リュシームさんは仕事机に向かって、いつものように熱心に羽ペンを動かしている。あたしは片付けようと手にした数冊の本を再びテーブルに戻すと、リュシームさんの横へそっと近づいた。

「あの〜」

「……なに？」

返事はあるものの、あいかわらず顔を上げようとしない。仕事中にはあまり声をかけちゃいけないんだけど、でもつい、しつこくきいてしまう。

「町へ、何しに行くんですか」

「さしずめ見学かな。イズミ初めてだろう」

「見学って、何を見るんですか」

「店とか、人とか」

「時間かかりそうですか？」

リュシームさんはようやく顔をあげた。眉をよせ、少し気分を害した様子である。

「なに、行きたくない？」

「いえっ、そういうわけじゃ……ただお仕事あるのに、大丈夫かなあって」

「僕の仕事のことは、僕が一番良く分かっている。イズミが心配す

ることない」

「はい……」

あたしは本の片付けに戻ると、チラリとリュシームさんの様子をつかがう。リュシームさんは特に怒ったふうでもなく、再び仕事に没頭していた。

どういふ風のふきまわしだろう……仕事、休むなんて。

あたしは普段のリュシームさんがいかに仕事人間か知ってるから、なんだか申し訳ないような変な気持ちだ。

ただの町見学だったら、ライラさんが買出しに行くときにも連れてってもらえばいいんじゃないかな……そうエルナンさんにぼやいたら、『そんなこと絶対、師匠に言っってはダメですよ』って釘刺されてしまった。

「どうしてライラさんと町へ行っちゃダメなの？」

「ライラと町へ行っってはいけないわけではありませんよ。師匠と行くのを断ってはダメだで行ってるのです」

「でもそうしたらリュシームさん、午後いっぱい仕事お休みしなくちゃいけなくなっちゃいますよ？ そのぶん今夜、徹夜になるかも……そしたらエルナンさんもラッセさんも徹夜になっちゃうでしょ」

「我々までお気づいくださるやさしい気持ちにはうれいのですが、とにかく今日は師匠とお出かけください。師匠がいない間は我々ができる限り仕事を進めておきますので、徹夜にはなりませんよ。ご安心ください」

「……なんか、すみません」

そんな話をしていたら、ラッセさんが通りかかった。しかも……

「ついでにお土産でも買ってもらおうといい」  
「お土産!？」

まさかラッセさんの口から、そんな言葉が出るとは思わなかった。

「じゃあ何がいいですか」

「俺達のじゃなくて、あんた自身のお土産という意味だ」

「あ、あたしのですか？」

すると何がおかしいのか、エルナンさんが笑いながら「それは名案ですね」とラッセさんに同意した。

そんなわけで午後、私はリュシームさんと町へくりだした。

町には『こんななにしたのか!』というくらい大勢の人でにぎわっていた。今までお城の中の人間しか知らなかったから、なんだか奇妙な感じだ……ついでに言うなら、いつもと違う格好してるから変な気持ち。

リュシームさんはいつものローブ姿ではなく、鮮やかな青い上着に同色のカツコイイ帽子を被ってる。一方あたしは、ライラさんが選んでくれた『外出着』を着ていた。

「疲れてない、イズミ？」

「いえ、大丈夫です」

さっきから同じ会話ばかり繰り返してるあたしたちは、会話もぎ

こちなく並んで歩いてる。

道の両脇には色んなお店があつて楽しそうだけど、とても『ここ入つてみていいですか』とは言い出せそうにない。思わず、といった感じで大きなため息をつく、隣のリュシームさんが足を止めた。

「やっぱり疲れてるね」

「そうかも、しれません……」

精神的に、ですが。

「じゃあ、その店に入るうか」

あたしはびっくりしてリュシームさんの指し示した店をみた。ガラス越しに見える店内の様子から、どうもカフェみたいだ。なんだ、もっと早くに疲れたつて言うんだつた。

あたしはわくわくしながらリュシームさんの後を追つて店内に足を踏み入れた。

小さな入口の店だが、中に入るとなかなか広い。中央の空いてるテーブルに着いたあたしたちは、さっそく店員に渡されたメニューを開いた。

「読めそう？」

「あんまり……」

一応こちらの言葉は勉強しているけど、まだメニューを理解できるレベルまで至つてない。『水』ぐらいしか読めないよ。

「冷たいジュースをもらおうか。何か食べる？」

「いえ……」

と、そこでラッセさんたちの言葉を思い出した。お土産、買ってもらえって言ってたな。

「あの、お菓子とかありますか」

「お菓子が食べたいんだ？」

「えっと、今食べるんじゃないですけど……その、お土産にしてもいいでしょうか」

「お土産？」

ああー、なんか微妙な顔されてる！ 言っんじゃないかった、と後悔したそのとき。

「もちろん、お土産の分も買ってあげるから、ここでも食べて行くといい。他にもなにか欲しいものがあつたら遠慮なく言うこと。いいね？」

なんとオーケー出たよ！ しかもリュシムさん、上機嫌で笑っている……そっか、ここは素直に甘えてよかったのか。遠慮が美德の日本から来たあたしは、こういう展開を考えるに至らなかつたな。ラッセさんたちのアドバイス聞いたとてよかった。

考えてみれば異世界って外国みたいなもの、習慣や考え方が違うのはあたりまえなんだ。

こうして美味しいお菓子とジュースをたいたら、お菓子の入ったお土産の箱を抱えてお店を出た。

お菓子なら皆にわけてあげられるな、と考えていたら、いつの間にか別の店に入っていくリュシムさんの姿に気づき、あたしはあわてて後を追った。

今度の店内は、たくさんの洋服がディスプレイされていた。どうやらすべて女物のようだ……まさか。

「イズミ、どの色が好き？」

やっぱり、今度は服をお土産に買ってくれるつもりなんだ！？  
どうしよう、ここは謙虚に断ったほうがいいのか？ それとも素直に選んだほうがいいのか？ 悩む……。

結局あたしは、リュシームさんにきいてみることにした。

「そのう、あたしこちらの習慣ってよく分からないんです。私の住んでた場所だと、こーゆー場合は遠慮するのが礼儀って感じなんですけど、こちらの世界ではどうなんでしょう？ さっきお土産買ってもらったし、やっぱり二回目は遠慮したほうがいいんですか？」

リュシームさんは、なんとも複雑な表情を浮かべた。

けっきょく両手いっぱいのお土産を抱えて帰宅したあたしは、ここに顔のライラさんに出迎えられた。

最近では異世界語でちょっとしたコミュニケーションをとれるようになったので、ライラさんが「よかったですね」みたいなことをしきりに言ってるのが理解できた。でも「いいことでしたね」みたいなことも言われ、首をひねってしまった。

しかも「リュシームさんに見せてくるといい」みたいなことを言われ、あたしは買ったばかりの服を着せられてしまう……なんだろう、こっちの世界ってプレゼントされたものをすぐに使ってみせるのが礼儀なんだろうか？

とにかく室内で着るには仰々しい服を着せてもらい、さっそくリュシームさんの仕事部屋へ向かう。きつとエルナンさんたちもいるだろうから、お土産も渡せてちょうどいいとお菓子の箱を手に向かった。

「……イズミ……」

ノックしようとして、あたしは扉の前で固まった。中から皆の会話が聞こえる。しかもあたしのことを話してるっぽい……中に入りづらいな、とその場に立ったまま後で戻ってこようか悩んでいたら、いやおうなしに話の内容が聞こえてきてしまった。

「でも、帰せることは帰せるのでしょう」と、エルナンさんの声。

えっ、帰せる？ どこに？

「後から知ったらショックなんじゃないか」と、今度はラッセさんの声。

どうしてだか、リュシームさんの言葉は聞き取れない。ただ何か怒ったような、あわてたような感じ。それに答えるように、エルナンの言葉がはっきりと聞こえてきた。

「イズミを帰したくない師匠の気持ちも、分からなくもないですが……」

なに？　なんだって！？

気がついたら、あたしはバターンと音をたてて大きく扉を開いていた。

そこには驚いたように振り向くリュシムさんと、落ち着いた様子であたしを見つめてるラッセさんにエルナンさん。

「今の話、どついついこと！？」

（つづく）

## 5・帰れない理由とこれからのこと

「イズミ、これは」

「帰せるって、どういうことよ!？」

青ざめた表情のリユシームさんの言葉をさえぎって、あたしは声を張り上げた。

「あたし、本当は自分の世界に帰れたの!? それなのに、帰しなくなかったの? それって、どういうこと!？」

だまされたような気分になり、あたしはショックで泣き出してしまった。

ずっと信じてたのに……きっと元の世界へ帰してくれるって、リユシームさんだけを頼りにしてたのに……だまってたなんて酷い。

「イズミ落ち着いて、師匠は……」

エルナンさんの言葉をふりきってあたしは廊下へ飛び出すと、もと来た道をダッシュで走る。後ろから追ってくるのはひとり、きつとリユシームさんだろう。いや、エルナンさんかな。まあラッセさんではないだろうな……いや、そんなことどうでもいい。

問題は、約束が違うってことだ。

あたしを元の世界へ戻す方法が分からないって言うてたくせに……だまされて、ここに引き止められていたんだ。

自分の部屋を通り抜け、庭へ飛び出したあたしは、芝の上に身を投げ出してウエウエとむせび泣く。泣いてるうちに、なんだか冷静

になってくる……そのうち眠ってしまったようだ。

夢の中で、あたしは道を歩いていた。あ、知ってる、予備校の帰りだ。

いつもの日の暮れた帰り道、すっかりお腹が空いたあたしはコンビニに寄ろうと思ったところ。その時、あたしの名前を呼ぶ声が聞こえた。「いずみ」って。あの時と、まったく同じ。

振り返って、道を横切ろうとして……そして、まぶしい光に包まれた。

それは、あたしに突っ込んできたトラックだった。

「イズミ」

目が覚めると、ひんやりとした芝が頬に感じた……薄暗いけど、いったい今何時だろう？

のろのろと体を起こしたら、腕組みしたリュースムさんが仁王立ちで目の前に立っていた。

「まさかこんなところにいたとは……これからは、ふて寝するときには少なくともベッドの上にしなさい。風邪を引いてしまう」

「はあ……」

なんだか気が抜けた返事しか出てこない。

「あのう」

あたしはおずおずと切り出した。

「リュシームさんって、もしかしてあたしを助けてくれたんですか」  
「……どうしてそう思うの」

「いま夢を見て、ハッキリ思い出したんです。あの時トラックが突っ込んできて、あたしそこから記憶がないんです……その後は、この世界にきたところからしか覚えてない」

リュシームさんはふう、と大きく肩でため息をついた。

「とにかく中へ……」

とりあえずあたしたちは、いったん部屋へ戻ることにした。

リュシームさんはあたしをベッドに座らせると、自分は椅子を持ってきてあたしと向かい合わせに腰を下ろす。

「あのね、イズミ……たしかにちゃんと説明しなかった僕が悪かった。でも僕は、少なくとも君がこちらの生活になじんで、こちらでもやってけそうな状態になるまで、いろいろ話すのは待った方がいいと思っただ」

「それは、どうしてでしょう?」

リュシームさんはじつとあたしを見つめる。なんか、嫌な予感。

「……たしかに僕は、君を元の世界へ戻すことはできる。でもそれは、君がこちらへ召還された瞬間へ、という意味だ」  
「つまり、あたしがトラックにひかれそうになる瞬間ってことですか」  
「そう」

そうだったんだ……。あたしは頭を下げた。

「すみません、だからあたしを戻そうとしなかったんですね……元の世界に戻ったら、あたし確実に死にますもん。元の世界に戻った瞬間、トラックにひかれてあの世行きてわけですね」

うわっ、声が震える……。元の世界へ戻ったら、確実に命がないんだあたし。

リュシームさんの視線が窓の外へと向けられた。

「君を見つけたのは、本当に偶然だったんだ……」

そしてゆっくりと説明を始めた。

「別の異世界から魔族を召還しようとしたとき、ちょうど近くの異世界から何か強い意識が飛び込んできた。『助けて』って……おそろく君の心の叫びだろう。次の瞬間、僕は迷うことなく君をこの世界に召還していた」  
「そうだったんですか……」

あたしはリュシームさんに命を助けられたんだ……。でも、言葉通り『死にたくなければ』二度と元の世界へ戻れない。

「泣いてもいいんだよ」

言われなくても泣いてる。リュシームさんはこわごわあたしに手を伸ばすと、そつと頭を抱えるように軽く抱きしめてくれた。

「ごめん、こんな伝え方になっちゃって」

いいんですって、そんなの。立ち聞きしちゃったあたしも悪いんだし……きつとエルナンさんとラッセさんは、あたしが扉の外で立ち聞きしてるの知ってたんだ。

だってあのとき扉の外で聞こえてきた会話は、リュシームさんの言葉だけ聞き取れなかった。けど二人の言葉は理解できたんだもん。きつといつものように魔法を使つて、異世界語を理解できないあたしのために言葉を伝えてくれたに違いない。

帰れない、その一言がなかなか言い出せないリュシームさんの事情を、あたしに伝えようとしてくれたのだろう。

そのことをリュシームさんに話すと、リュシームさんは「あいつら知能犯だな」と苦笑いしていた。とにかくこんなわけで、あたしが元の世界へ戻れないことは確定したのだった。

「ああでもしないと、師匠はいつまで経ってもあなたに何も言わないだろうっ?」

後日、あたしがエルナンさんたちを問い詰めると、二人ともあっさりと認めた。

やはりあたしが立ち聞きしたのを知っていたのだそう。詳しい事情を聞くと、実はこの一ヶ月彼らのあいだで何度もあんな会話をくり返していたらしい。

「結果的に誤解がとけて、よかったじゃないか」

「ラッセさん……そりゃそうですね」

「それに、君もいいかげん本当のことを知りたかったでしょう？」

「エルナンさん……まあ、たしかにそうですね。いくらあたしの想像力を持ってても、まさか自分の命がかかってるから帰れないとは思いませんでした」

すると二人は顔を見合わせ、それから同時にため息をついた。

「やっぱり師匠は、あなたに肝心なことを伝えてないようですね」

「肝心なこと！？ これ以上なにかあるんですかっ！」

「……直接きてみたらどうだ、なあ師匠？」

ラッセさんの視線の先にはリュシームさんの姿。あたしと目が合ったとたん、ぱつと視線を外された。

「無い、もうこれ以上は何も無いっ……だからイズミもこれ以上きかないように！」

「えー、本当になにも無いんですか？」

「無いっただけ無い。お前達もイズミに余計なこと吹き込むな。さっさと仕事へ戻れ」

「かしこまりました、師匠」

「了解、師匠」

二人はリュシームさんにていねいなおじぎをすると、さつさと自分の持ち場へ戻ってしまう。あたしは隣で顔を真っ赤にして怒っているリュシームさんを見上げ、ちよつと首をひねる……アヤシイ、あやしすぎる。」

疑いの眼でじつとリュシームさんの顔を見つめていたら、リュシームさんはチラリとあたしの顔を見下ろして小さく咳払いをした。

「まあ、とにかくイズミは気兼ねせず、これからもこの城に住んでもらってかまわない。無理には言わないが、まあ居たいだけ居ればいい……その、もちろん僕も君に居てもらえとうれしい」「ホントですか!？」

あたしの返事に、リュシームさんはいそいで言葉を続ける。

「君に居てもらえとうれしい、というのは、つまり助手がいれば助かるって意味だ。だから僕は君に居てもらいたいし、できればずっとここに居てもらいたい。それだけだから」

そう言っただけで仕事机へと戻ったリュシームさんの顔は真っ赤だった。あたしがお礼を述べると、リュシームさんの横顔はますます赤くなる。後ろからエルナンさんと、そして珍しくラッセさんの笑い声が聞こえてきた。

あの様子は、あたしでも分かる……照れてるんだ。

いいひとに召還してもらってよかった。

あたしはこれから異世界で生きていく。

でも大丈夫。あたしには素敵な召喚士がついているもの、ね？

(おむす)

## 恋する召喚士

召喚士リュシームは久しぶりに恋をしていた。相手の名はイズミ、異世界から召喚した女の子である。

「師匠の好みって、ああいうタイプだったのですね」

「まさかロリコンとは知らなかったな」

二人の弟子は仕事の手を止めず、こっそりと師匠の様子を観察していた。

リュシームはいつものように仕事机に向かいながらも、どこかそわそわした様子である。意識してるのだ、きつと……すぐかたわらで仕事を手伝う少女を。

イズミは資料の整理を手伝いながら、リュシームに何事かたずねてる。この世界でも五本の指に入るであろう召喚士は、だが不器用にもそつけない返事しかできず、時おり小さく、切ないため息をついていた。

そんな具合だから、当然リュシームの気持ちなどイズミにはちっとも伝わっておらず、はたから見えて大変もどかしい状況だ。

「ロリコンはちよつと言い過ぎですよ」

「まあ、あの程度の年齢差はめずらしくはないけどな」

しかしリュシームは年の差を気にしてるらしい。イズミは17歳だそうだから、今年28歳になるリュシームとは11歳差ということになる。

しかもイズミの世界では知らないが、こちらの世界の17歳にしては発育がやや遅れてるように思われる。これではロリコンだの少

女趣味だの言われても仕方ないかもしれない。

自他共に認める仕事人間のリュシームも、過去に二度女性と付き合った経験がある。二度ともリュシームから告白して、二度とも最終的には振られてしまった、そんな苦い経験だ。

若いころから優秀で、魔法学校に在学中は常に首席だったリュシームは、その知的で端正な容貌もあって、学生時代から相当もてた。しかし当の本人は単に勉強好きなだけの、中身はちょっとナイーブなく普通少年に過ぎなかった。だから言いよってくる野心的なコワイ美女よりも、ごく普通のクラスメートの女の子に恋をした。

しかし普通の女の子はリュシームを『高嶺の花』と勝手に思っている節があり、リュシーム少年が勇気をふるって告白してもなかなか信じようとしない。なんとかお付き合いにこぎつけても、リュシームの不器用さも手伝ってすれ違いが生じ、結果的に振られてしまうのだ。

恋に破れたリュシーム少年はいつそう勉強にのめりこみ、気が付いたら優秀な召喚士になっていた。そしてますます恋愛から遠ざかっていった。

そんな恋に不器用な召喚士が、久々に恋をしたのだ。相手はまたしてもごく普通の、だが自分よりひとまわり年下の、異世界からきた女の子……恋愛に関して臆病になっているリュシームが、なかなか積極的な態度をとれないのも無理はない。

そんなある日のこと、イズミが二人の弟子に相談を持ちかけたきた。

「町見学に連れてくってリュシームさんが言うんですよ……でも、

ライラさんに連れてってもらえばいいし、断ろうと思って」「そんなこと絶対に師匠に言ってはダメですよ」

弟子のひとり、エルナンがあわててイズミを止めた。そんなことリュシームが聞いたら果てしなく落ち込むだろう。

それだけならいいが、落ち込むと仕事にのめりこむリュシームのことだ。きっと弟子である自分達もその激務に付き合わされ、連日徹夜になってしまつてしまつに違いないのだ。

どうやらイズミは、仕事で忙しいリュシームに気づかつて遠慮してるようだ。しかしこれは、どう考えてもリュシームがイズミをデートに誘つたと思えない。

しかし例によって不器用なリュシームは、照れもあつてか『町見学』などという口実を作つてイズミを誘つたらしい。

やれやれ、と二人の弟子は苦笑をもらすしかなかった。

そんなこともあつて、初デートも無事おわつたその夜……とうとうイズミは、元の世界に帰れない理由を知ることとなった。

イズミは命の危険に直面した瞬間に召還された。

元の世界へ帰るためには、その瞬間へ帰るしかなく、つまりイズミは再び命の危険にさらされることとなる……これでは元の世界へ帰すわけにはいかない。

でも、それ以上に、リュシームがイズミを帰したくない理由があった。異世界に帰すとなると、おそらく今生の別れとなる。

リュシームはイズミに恋をしていた。イズミと別れなくなかったのだ。

しかし。

「なぜ告白しないのでしょうか……」

「さあ、師匠の考えてることはいまいち分からん」

イズミはこの世界にとどまることになった。リュシームのことはあきらかに『保護者』として見ている。リュシームの切ないため息が、以前より増えた。

でも、以前よりしあわせそうである。

「手元に置けるとなったら油断してるな。そのうちトンビに油揚げ、なんてことがなけりゃいいが」

「ま、その時は影ながら協力するしかなさそうですね……失恋なんてされたら、我々も今まで以上に激務を強いられて困りますし」

来週は、定例の魔法集会が王宮で開かれる予定だ。リュシームはイズミを連れて行くつもりのようなのだが、王宮にはその他大勢の魔法使いや召還士も集まってくる。中にはイズミの好みのタイプもいるかもしれない。

それ以上に、魔法集会の主催者であり、自身も魔法使いである第三王子は眉目秀麗の大変魅力的な人物である。たとえアイドルのようない気持ちでも、イズミの心が王子に向いたら、リュシームのガラスの心は壊れてしまいかもしれない。

「まったく世話の焼ける師匠だ」  
「本当に」

師匠にマツタク期待していない二人の弟子は、いつかイズミが師匠を好きになってくれるよう祈るしかなかった。願わくば、そうなたあかつきにはイズミから積極的になって欲しいものだ、とも。

「でもうまくいったら、仕事そっちのけになった、なんてオチにならないだろうな」

「それは……どうでしょうね」

自分達の保身のことばかり話してはいるが、これでも師匠にはしあわせになってもらいたいと心から思うエルナンとラッセだった。

（おわり）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9460s/>

---

召喚魔法

2011年5月21日08時02分発行